

# 不合理なニュースの受容 —合理的推論の欠如：N I Eへの指針—

Accept of Unreasonable News  
—Lack of Rational Reason : Guide to N I E—

野 中 博 史

メディアのニュースに接して人々は、その内容をどのように受容していくか。ニュースの効果研究に関する先行研究では、20世紀に入ってから様々な例が報告されているが、近年はとくにその効果の大きさが指摘されている。メディアが多様化しているにも係らず、情報や主張、イメージ、映像が画一化し、人々に対するニュース効果は強力になっているとする見方が強い。一方で、過剰な情報や主張、イメージを消化しきれない人間が増え、貧しい判断力や想像力しか持てない“象徴的貧困”状態を招いているとの考察もある。こうした状態で、人々は一般人の常識と合理的推論で判断して「根拠のない不合理な情報」に対してどのように受容するのか。懐疑心を持たずにニュースを受容すれば、人は容易に情報に操作されることになる。逆に言えば、メディアを利用した情報操作が容易になる。本研究では実際の新聞記事を用いて①人は根拠のない不合理な情報を容易に受容する②人は根拠のない不合理な情報に魅かれ易い③人には願望や恐怖心があり、そうした心性が強いほど、それを満足させる不合理な情報も受容しやすい④人は根拠のある合理的情報に接すると、不合理な判断を修正することが多い—などの知見を得た。合理的推論思考や冷静な思慮を欠如させたニュースの受容性の特徴は、真実を追求しようとする視点の衰退につながり、適正な判断力の育成を阻害する。従って、教育の現場で新聞を活用するN I E（Newspaper in Education）においては、ニュースの受容性の特徴を認識した上で、教員が合理的な推論思考と知識を持ち、児童、生徒の適切な判断力の育成に努めることが大切である。

**キーワード：**ニュースの受容性、象徴的貧困、根拠のない不合理な情報の受容性、合理的推論思考の欠如、適正な判断力の育成

## 目 次

- I はじめに
- II ニュースの効果と現代的問題
- III 非合理的なニュースの受容

- IV 論理的根拠を欠くニュースの受容
- V 論理的根拠のあるリスクニュースの受容
- VI 信念・思考の修正
- VII メディアの信頼度と影響度
- VIII まとめ

## I はじめに

民主主義社会における報道の使命は、主権者である国民に情報を伝えることである。国民はメディアが提供する情報（ニュース）に基づいて、自らの生き方、暮らし方を判断し、決定する。下した判断が誤った場合、その人の人生の幸せと安全は脅かされることもありうる。民主主義国家では、国民1人ひとりの判断の累積が世論として集積され、社会に影響を与えることを考えれば、1人ひとりの判断の誤りは社会を危機に陥れることになる。言葉を換えていえば、民主主義とは情報の受容に基づく国民の自己統治を趣旨とする社会システムである。

一方、国民は情報を自由に受け取り、自らの思考を高め、感情を豊かにすることで、人格を形成・発展させ、自己実現を図ることが出来る。また、そうして自己実現した思考や感情を自由に発表することで、他者に影響を与え、よりよき社会の実現に寄与できることになる。国民の意思・判断によって社会の意思決定がなされる民主主義社会では、国民がその能力を最大限に活かすことができる自己実現が、社会にとって重要と見なされる。

また、国民の思考・判断によって意思決定がなされる民主主義社会では、国民が、自己の思想を自由に表明しあうことによって、真理（真実）に近づくことができ、社会全体として正しい結論に到達できる可能性が増大するという考えが根底にある。

つまり、民主主義社会にあって情報は、国民の自己統治、自己実現、真理の発見のために不可欠であるといえる。情報を伝えるメディアの中でも新聞は、古くから記事や論説を通じて、人々の意見や考え方の形成に影響を与える「世論形成効果」があるとされている。一般に、人はマスメディアの記事や論説によって、その考えが大きく左右される。事実、筆者が高校生を対象に実施した「新聞記事による意見形成影響調査」<sup>①</sup>によると、新聞記事が高校生の意見形成に与える影響はきわめて大きいことが分かった。そうした前提に立って、これまでに「情報源が同じニュースであっても特定のメディアの特定の記事だけをN I Eの実践活動に利用すると、偏った見方を助長する可能性が出てくる」<sup>②</sup>、「メディアのメッセージを受け取った人が多数を占めると、少数派は沈黙しがちとなって、意見の多様化が阻害される」<sup>③</sup>ことがあることを指摘してきた。

本論文は、新聞記事に掲載されたニュースの中でも、明確に不合理な恐怖情報や、パニックになりやすいとされるリスク情報を人々がどのように受容するかを考察したものである。合理的に推

論して不合理と見られる恐怖情報やリスク情報を人は受容するか否か。受容するとすれば、何故受容するか。不合理なニュースとその受容との関係を解き明かすことは、ニュースに対する適切な判断力を育む上で不可欠と見られる。

## 第I章 ニュースの効果と現代の問題

メディアの提供するニュースが人々にどのような影響を与えるかについてはServinとTankardのモデルが知られている。それによると、ニュースが受け手に与える影響や効果は年代別に大別される。それは次の通りである。

- ・弾丸効果モデル（新聞を見て一般の市民が直接影響を受ける：1920～40年代前半）
- ・限定効果モデル（人々のメディアによる影響は限定的である：1950～60年代中頃）
- ・強力効果モデル（人々のメディア依存が高まり、影響力が強まっている：1960年代後半～現在）

弾丸効果モデルはマスメディアの報道によって、政治エリートやオピニオンリーダーが大衆を誘導できるとされていた時代のメディア効果を示すものである。事実、新聞やラジオの登場によってメディアは大衆に大きな影響を与えることとなった。それは、情報から阻害されていた国民を啓蒙する大きな役割を果たしたが、一方でナチス政権下のドイツのニュース報道や、第2次世界大戦中の日本のニュース報道に見られるように、メディアは政治権力によっていとも簡単に大衆を操作できることを証明した。逆にいえば、国民大衆はメディアの報じるニュースに直接的に大きな影響を受けたということである。

限定効果モデルは第2次大戦後からテレビが新しいメディアとして普及するまでの時代における人々のニュースに対する受容性を示すものである。それによると、人々は生まれてから成長する過程でそれぞれ獲得した知識や思考といった「先有傾向」を形成しており、ニュースに対する受容性は限定的であるとするものだ。ニュースに接してもそのまま信じ込むことはせず、懐疑心を持つ。あるいはそれまでに獲得した知識や思考を変えない姿勢を維持する。

強力効果モデルは本格的なテレビ時代になって人々がマスメディア、特にテレビに依存する傾向が強くなったという観点に立って主張されたものである。メディアで提示された意見が社会の中で支配的となり、少数意見が沈黙するというノエル・ノイマンが提示した「沈黙の螺旋」は、強力効果モデルの一側面を現すものである。また、ベルナルド・スティグレルが主張し始めた「象徴的貧困」は、「情報やイメージ、映像があふれる現代社会で、人々の関心や話題が一つの極に向かっていく奇妙な現象」<sup>④</sup>であり「過剰な情報やイメージを消化しきれない人間が貧しい判断力や想像力しか手にできなくなった状態をさす」<sup>⑤</sup>としているが、それもメディアの効果の大きさと、逆説的にいえばメディアのニュースを受容しやすくなった現代人の意識構造の問題点を示しているといえよう。

人々がメディアに依存する傾向が強まった社会状況では、同時に人々は情報の選択や判断を他

人に任せることが多くなる。その結果、メディアの影響が更に大きくなる。例えば、娯楽化された報道を取り仕切るキャスターの意見はそのまま世論を形成しかねない。メディアのニュース効果の肥大化は、人々の意見の寡占化につながり、世論が単一化する可能性を示しているといえる。

世論の単一化は国民を“熱狂”へととぎさないかねない。メディアに依存する傾向が強まっている現在は、ある意味でかつてないほど世論の単一化と熱狂の危険性をはらんだ社会といえる。しかも、世論は必ずしも合理的に形成されるわけではない。人はしばしば不合理なニュースや論理的根拠のない情報を信じ、真理や真実、科学的知見などの合理的根拠を無視して思考し、行動する。しかも、そのような場合の方が人は熱狂しやすい。その意味で、現在の状況は、不合理な世論による社会の意見の単一化や政治の専制化が、メディアを介して一段と強まる可能性があるといえるのではないだろうか。

現代のメディアとニュースの受容の関係は、そのような観点から考察する必要があるし、N I E (Newspaper in Education) の場においても、ニュースの受容について適切な指導が求められる。

## 第II章 非合理的なニュースの受容

都市伝説という噂話がネットで大量に流れている。いずれも、全く根拠のない噂話や作り話であるが、いかにも真実らしく記述されているため、広く信じられた例がないともいえない。例えば「米国で老婦人がネコにシャボンかけた後、電子レンジで乾かしたところネコがレンジの中で爆発。老婦人は電子レンジの会社を相手取って裁判を起こし、多額の賠償金を勝ち取った」というかつて流布した都市伝説はかなりの人々が信じたのではないだろうか。

人は情報をどのように信じるか。あるいは、どのような情報であれば信じやすいか。1983年、米国のラジオプロデューサーであった若きオーソン・ウェルズが「宇宙戦争」というドラマの中で、ニュース報道の形式をとって「火星人が来襲し、軍隊と交戦状態にある」ことを報じたところ、それを信じた人々が逃げ惑うなど全米でパニックが起こったことはよく知られた事実である。一般的に、情報の出所が信用性の高い機関であれば人々は信じやすくなる。また、経験や知識に基づいて明らかに事実と思われる情報であれば信用するであろう。しかし、情報発信の出所がどこであれ、合理的に考えて荒唐無稽な情報を人々は簡単に信じるであろうか。

筆者は学生を対象に次のような調査を行った。使った資料は2006年4月1日付けの朝日新聞「祈りの効果はなし」(A)という記事と、それを「祈りの効果は大」(B)と筆者が改ざんしたものである。



(A：本物の記事：朝日新聞06年4月1日)

(B：偽の記事)

本物のAの記事は「米国のテンプレートン財団が行った実験で、心臓手術をする患者にまったく無関係の他人が手術の成功を祈ったが、その効果はなかった」というものである。科学的、合理的に推論すれば当然の記事である。記事の情報は信用するに足りる。大半の人が納得するのではないだろうか。

これに対し、記事Bの偽の記事は「祈りの効果は大であった」という内容である。筆者が朝日新聞の記事から切り取った活字を利用して、見出しや記事の内容を改ざんし、被験者用に作成したものである。第三者の祈りによって、祈られていることすら知らない患者の手術の成功率が高くなったり回復が早くなったりするだろうか。効果があると信じると偽の薬でも本物同様の効果が見られるプラシボ(偽薬)効果もこの場合は期待できない。つまり、合理的に考えれば祈りと効果との間には因果関係も相関関係も全くない荒唐無稽な話である。通常、そのような話は信じないので適切な判断力といえるのではないだろうか。

調査では、Bの記事だけを48人に対して見せた後、記事を信じるか否かをアンケートで答えてもらった。結果は以下の通りである。(表1)

①記事の内容は信じがたい	24人 (50%)
②人間には霊的な能力が備わっている	6人 (13%)
③実験の誤りではないか	2人 (4%)
④祈ることで人間は不思議な能力を発揮する	16人 (33%)

表1：偽の記事に対する結果

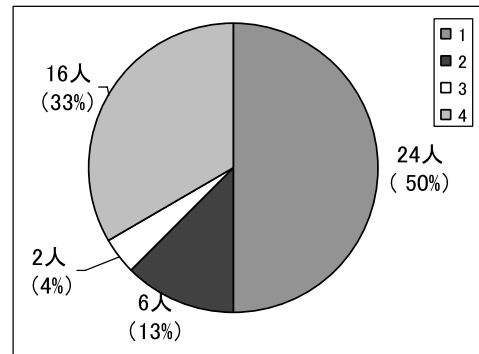
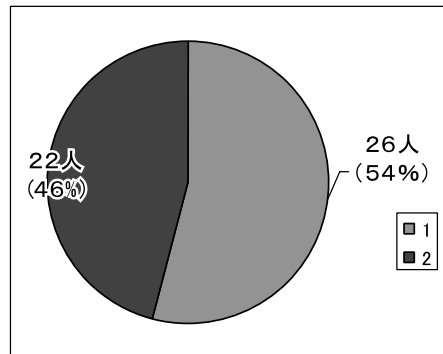


表2：祈りの効果を信じる割合



次に、記事の内容を信じない、実験の誤りではないか、とする回答を、「祈りの効果を信じない回答」として、人間には霊的な能力が備わっている、祈ることで人間は不思議な能力を発揮する、と答えた回答を、「祈りの効果を信じる回答」として再計算すると、祈りの効果を信じない回答が26人（54%）であるのに対し、祈りの効果を信じる回答は22人（46%）になった。（表2）根拠のない非合理的なニュースを信じる回答と、信じない回答との間に有意の差はないと言ってよい。

確かに全体としては祈りの効果を否定する回答が半数を超えている。しかし、祈ることで人間は不思議な能力を発揮するという回答も少なくない。科学的根拠が薄く、合理的に判断して疑問の残る記事Bを信じない回答の方が、信じるとする回答をわずかに上回ったが、それにしても荒唐無稽で、合理的推論をするまでもなく常識的に考えれば信用しがたいと思われる話を信じる回答が半数近くに達したのは、非合理的なニュースに対する受容性の高さを示しているといえる。

一般的に「そうなって欲しい」という欲求や「そうならいいのに」という希望的観念や先有傾向が強いと、人はそうした心性や観念にあった情報を信じやすくなるといわれるが、祈りの効果を示すニセの記事についても同様のことがいえるのではないだろうか。「祈る事によって病気が治って欲しい」、あるいは「祈ることによって速く治癒したらいいのに」と希望するのは人間の本性の一部であるからだ。詳しくは今後の考察を待たなくてはならないが、いずれにしても、どのように荒唐無稽で科学的・合理的に根拠のない話であっても、人は新聞記事に掲載されたニュースを信じやすいのは確かなようである。

### 第三章 論理的根拠を欠くニュースの受容

合理的根拠のない情報である「祈ることで治療成績が良くなる」というニュースを信じるのは「そうなって欲しい」という欲求や「そうならいいのに」という希望的観念もしくは先有傾向によるものと推察できるが、不安や恐怖心の場合はどうであろうか。恐怖や不安の対象が「実現して欲しい」とか「実現したらいいのに」とは誰も思わない。だとしたら、それを暗示する情報があ

っても否定しそうなものだが、事実はむしろ逆である場合が多い。石油ショック当時のトイレットペーパー騒ぎは、そうした人々の不安心理が、「トイレットペーパーが無くなる」という根拠の薄弱な情報に煽られてパニックをもたらした結果といわれている。

「幽霊の正体見たり枯れ尾花」ということわざは幽霊が怖いと言う日頃からの恐怖心が、枯れスキという情報を見ただけで幽霊と信じてしまうということであるが、不安や恐怖心はしばしば人の情報の受容過程を曲げ、判断・認識に狂いを生じさせる。病気や精神的ストレスを抱えている人に近づき、不安を煽って金をかすめとる霊感商法などはその代表的な例である。不安や恐怖は、対極的位置にあると見られる希望的心性や観念と同じように人の適切な情報受容・認識過程に狂いを生じさせる、とあってよいだろう。

不安や恐怖は病気だけではない。現代人は様々な不安や、漠然とした恐怖心を抱いている。健康、仕事、老後、将来設計、いつ発生するかもしれない地震やテロ等等。現代人は誰もそうした不安と漠然とした恐怖感の中で暮らしていると言ってもよい。だとしたら、誰もが霊感商法の被害者を笑うことはできなくなるかもしれない。社会全体が不安と漠然とした恐怖心を抱いている中にあるのは、人は不安心理を煽る情報を受容しやすくなると考えられるからだ。

例えそれが論理的根拠を欠くニュースであっても、人は合理的推論よりも恐怖や不安が先立ち、容易にニュースを受容するのではないだろうか。前述のように受容して形成される意見が多数派を占めるようになると、少数派は沈黙し、意見を他人に任せるような事態になりかねない。それは社会を錯誤と混乱の淵に陥れることにもなる。

そこで筆者は、論理的根拠を欠き、しかも人が恐怖心を抱きやすくと見られる記事に対する読者の受容性を考察するため「アイスマンの呪い」という見出しのついた2006年1月12日付け朝日新聞記事に対する人々の受け止め方を調査した。記者がどのような意図でこのニュースを取材し、ニュースの価値判断をするゲートキーパー（編集者）がどのような意図でこのように大きく掲載したかは不明だが、読み手には恐怖心を抱かせるに十分な記事である。

考察の対象とした読者は18～22歳までの大学生133人。実際の記事を読んでもらった後、次の設問に答えてもらった。



2006年1月12日：朝日新聞

問Ⅰ：記事を読んで思ったことを次の項目から答えて下さい。

①アイスマンの呪いは十分に考えられる。  
 ②アイスマンと死亡者との間に関連性はない。  
 ③科学的に見て記事はおかしい。信じられない。  
 ④現在の科学では分からないことがたくさんある。呪いが存在してもおかしくない。  
 ⑤その他（ ）

問Ⅱ：上記の問いで①④を選択した人だけ答えて下さい。

①もともと呪いなど非合理的なものを信じていた。信じたいと思っていた。  
 ②この記事を見て、呪いなど非合理的な存在を信じる気になった。  
 ③その他（ ）

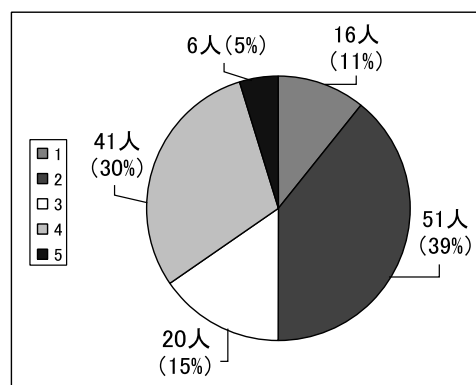
問Ⅲ：上記の問で②③を選択した人だけ答えて下さい。

①もともと非合理的な存在を信じていない。科学的、合理的に考えれば呪いは存在しない。  
 ②この記事を見ても、呪いなど非合理的なものを信じることはない。  
 ③その他（ ）

問Ⅰのアンケートの結果は次の通りであった。（カッコ内は比率）

- ①アイスマンの呪いは十分に考えられる。16人（11%）
- ②アイスマンと死亡者との間に関連性はない。51人（39%）
- ③科学的に見て記事はおかしい。信じられない。20人（15%）
- ④現在の科学では分からないことがたくさんある。呪いが存在してもおかしくない。41人（30%）
- ⑤その他6人（5%）

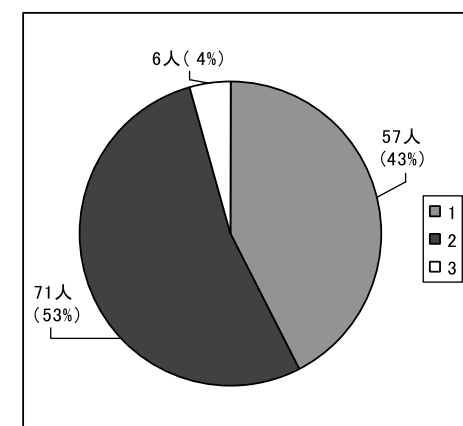
表3：問Ⅰの受容分布



次に、問Ⅰを「アイスマンの呪い」情報を何らかの形で信じるグループ（①と④を選択したグループ）と、信じないグループ（②と③を選択したグループ）に分けて再計算すると、その比率は次のようになった。

- ①アイスマンの呪い情報を何らかの形で信じる。57人（43%）
- ②アイスマンの呪い情報を信じない。71人（53%）
- ③その他。6人（4%）

表4：アイスマンの呪い情報の受容度

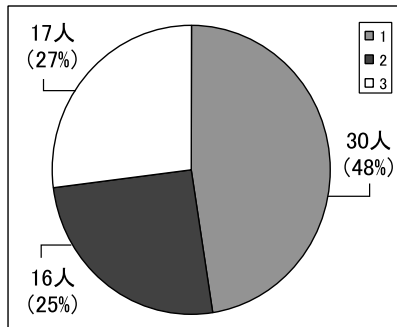


アンケートの結果では、アイスマンの呪い情報を信じる割合は43%に達した。「アイスマンの呪い」の記事は、「祈りの効果」の記事と同じように、合理的根拠のないニュース記事である。二つの調査は一年間の空白期間を置いて実施したものであり、かつ被験者となった学生は、祈りの効果の学生と全く異なっている。それにも係らず、信じる割合は祈りの効果の46%に比べ3%下回る43%であった。また、信じないとする割合は、祈りの効果54%、アイスマンの呪い53%ではほぼ同比率となった。

祈りの効果、及びアイスマンの呪いに関する問Ⅰのアンケート調査の結果は、いかに非合理的なニュースであっても人は容易に信じることを示しているといえる。祈りの効果の場合のニュースの受容要因は「～であって欲しい」という希望的心性や希望的観念であったと考えられるが、アイスマンの呪い記事を受容した人の心性は何か。人の心性と情報の受容性との間に関連性があるなら、アイスマンの呪い情報を信じた人たちはもともと、非合理的な存在を信じているか、信じたいと思っていたという推察が成り立つ。そこで、問Ⅱのアンケートを設定し、答えてもらった。結果は次の通りである。

- ①もともと呪いなど非合理的なものを信じていた。信じたいと思っていた。30人（48%）
- ②この記事を見て、呪いなど非合理的な存在を信じる気になった。16人（25%）
- ③その他17人（27%）

表5：アイスマンの呪いを信じた理由



その他の意見の主な内容は次の通りである。

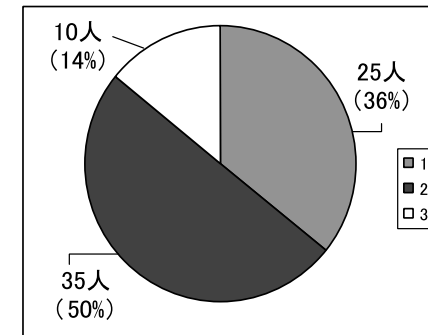
- ・偶然にしては7人の死者は多すぎる。
- ・実際に呪いに近い効果はある（マイナスプラシボ効果）。
- ・非合理的なものを感じることがあるので、呪いもありかな。
- ・偶然かも知れないが、呪いのようなものを否定はできない。おもしろいから。
- ・何となく信じた。
- ・信じてとまではいえないが、存在するのではないかと思う。
- ・夢を持たなきゃ楽しくない。
- ・もしかしたら（呪いは）あるかも知れない。
- ・もともと呪いを信じているわけではないが、あってもよいと思う。
- ・呪いが存在するかしないか分からない。
- ・呪いは信じるが、このアイスマンは呪いではないと思う。
- ・興味を引く大きな材料である。
- ・呪いを特に信じているわけではない。
- ・呪いが存在するかしないか分からない。
- ・関連性が分からないのでなんともいえない。

合理的根拠のない非合理的な呪いの記事を読む、と答えた人のうち約半数（48%）は、非合理的な存在を信じているか信じたいと思っている人たちであった。その他の意見でも「非合理的なものを感じる」、「興味を引く」、「夢を持たなきゃ楽しくない」、「おもしろい」といった答えが多く、先有傾向としての非合理的な存在に対する知的興味が、非合理的な情報の受容につながっていることが伺われる。

一方、「アイスマンの呪い情報は信じない」と答えた回答は71人と過半数を超えたが、被験者がどのような理由でそのように考えたかをアンケートで答えてもらった（問Ⅲ）。その結果は次の通りである。

- ①もともと非合理的な存在を信じていない。科学的、合理的に考えれば呪いは存在しない。  
25人（36%）
- ②この記事を見ても、呪いなど非合理的なものを感じることはない。35人（50%）
- ③その他10人（14%）

表6：アイスマンの呪いを信じない理由

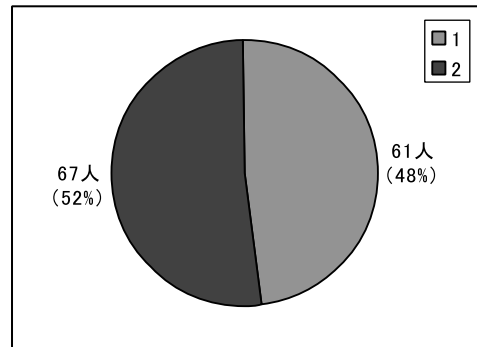


その他の意見は次の通りであった。

- ・偶然だと思う。
- ・根拠がない。
- ・信じたくない。
- ・呪いを信じないわけではないが、91年に発見されて、91年に7人が同時に亡くなったわけではないから（この場合は、呪いではない）
- ・呪い以前に人は必ず死ぬ。時期が重なっただけ。
- ・呪いは存在する。
- ・呪いは存在すると思うけれど、このケースでは関係していないように思う。
- ・呪いが存在するならば、見物人や博物館員に害がないのはおかしい。それに7人はアイスマンの発見に関わり、多少なりとも注目されていたために、死亡したことが呪いのせいではと考え易くなっていたのでは？

「アイスマンの呪い情報は信じない」と答えた71人の回答のうち36%の回答者は、非合理的な存在を信じないと答え、記事を読んだ後も、50%の回答者が「記事の内容に影響されることはない」としている。しかし、記事の内容には懐疑心を持つものの「呪いの存在自体は信じる」と答えた回答が4つあった。従って、アイスマンの呪い情報を信じてと答えた回答57人を含め、呪い自体を信じる人は61人に達することになる。そこで、呪いを信じるか否かだけに限って数値の再計算をすると、「アイスマンの呪い情報は信じない」と答えた71人の回答から、呪いを信じるとする4人を差し引き、呪いを信じない人は67人に減少することになる。

表7：呪いを信じる人と信じない人の割合



以上のことから分かることは次の通りである。

- ①呪いは信じるが、アイスマンの呪い記事は信じない（情報の中身で判断する）
- ②呪いを信じる人と、信じない人の割合は61人（48%）対67人（52%）で、ほぼ同比率である。

被験者の50%に当たる人が呪いを信じ、論理的根拠のない恐怖心を抱かせ易い呪いのニュースを信じる人が43%に達するという事実は、非合理的なニュースの受容度が極めて高いことを示すといえるのではないだろうか。少なくとも、非合理で恐怖心を抱かせるニュースを人は容易に受容する傾向が強いといえる。

そのように考えれば、アイスマンの呪いの記事は、読者の潜在心理の中に呪いを恐怖心として刷り込ませるだけでなく、呪いの存在とその効果があることを読者の思考回路に抱かせたとしても不思議ではない。危険なのは、論理的根拠のないニュースが、人の思考回路のなかに組み込まれ、先有傾向となる可能性があるということだ。

#### 第IV章 論理的根拠のあるリスクニュースの受容

人は論理的根拠のない非合理的な恐怖情報を容易に受容することが「祈りの効果」「アイスマンの呪い」に関する記事の受容性アンケートの結果から推察できる。では、論理的根拠のあるリスク情報についてはどのように受容するだろうか。

新聞は社会で起きるリスク（危険性）情報を的確に伝える使命がある。リスクを伝えることで、社会に危険性を知らせ、それへの対応を促すという意味でリスク情報は、社会的に極めて意義の大きいニュースである。薬害報道、環境汚染情報、地震予知報道—などその報道はいち早くなされるのが重要である。しかも、リスク情報の多くは、アイスマンの呪いと同じように人の本来的な恐怖心を煽る。「幽霊の正体見たり枯れ尾花」ということわざ通り、人はしばしば不安や恐怖心によって情報の受容過程に狂いを生じさせる。だとしたら、リスク情報に関しても人は必要以上に恐怖心を抱くのではないだろうか。取材者である記者やゲートキーパーである編集者もその心性か

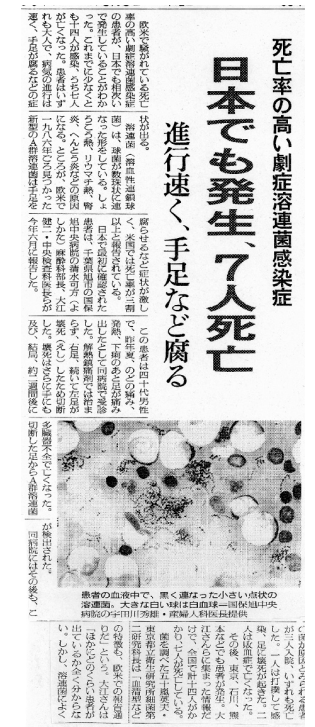
ら免れないのではないだろうか。

もともと、リスク情報は蓋然性（可能性）が高い。例えば、因果関係が明確でない段階で報道されることが求められる薬害や環境汚染に関する情報は、100%の確率でリスクが現出することを前提としない。あくまでも蓋然性の中で記事にするかしないかを判断するしかない。メディアの使命の一つは社会問題を人々に認知させることであり、リスクを伝えなかったり目立たないように伝えたりすることはメディアの使命放棄である。逆に過大に伝えると人はパニックになりやすい。従って、リスク情報に関して読者や視聴者はより冷静な受容が求められる。

果たして人は新聞のリスク情報に対して冷静な受容をするであろうか。人の情報受容過程が、合理的な根拠に基づくリスク情報と、合理的根拠に基づかない恐怖情報とで違いがあるのか。また、どちらがより受容しやすいのか。「アイスマンの呪い」と違って、一応合理的根拠に基づく情報を使って情報の違いによる人の情報受容過程の違いを考察した。

使った資料は93年9月9日付け朝日新聞に掲載された「死亡率高い劇症溶連菌感染症 日本でも発生7人死亡 進行速く、手足など腐る」と題する記事である。

当時、マスコミは「人食い菌」として大きく報じた。被験者は「アイスマンの呪い」と同じ学生である。比較精度を高めるため、同じ時間帯の授業で同じ学生を対象とした。方法は「アイスマンの呪い」と同じように、記事を読んでもらった後、下記のアンケートに答えてもらった。



1993年9月9日：朝日新聞

問Ⅰ：記事を読んで思ったことを次の項目から答えて下さい。

- ①恐ろしい情報である。
- ②感染性は弱く、それほど心配する必要はない。
- ③合理的に判断して、いちいち大騒ぎする必要はない。
- ④死亡率は高く、恐ろしい。
- ⑤その他。( )

問Ⅱ：上記の問いで①④を選択した人だけ答えて下さい。

- ①もともと健康や病気に対して神経質である。
- ②この記事を見て、日頃から健康や衛生に気をつけておくべきだと思った。
- ③その他

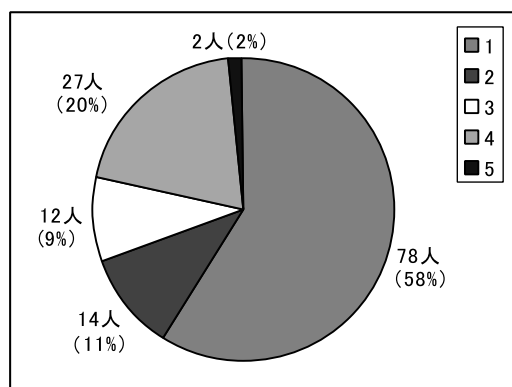
問Ⅲ：上記の問で②③を選択した人だけ答えて下さい。

- ①合理的に考えれば、健康人がそれほど恐怖に感じなくて良いものである。
- ②この記事の取り上げ方は大げさではないか。
- ③その他。( )

問 I のアンケートの結果は次の通りであった。

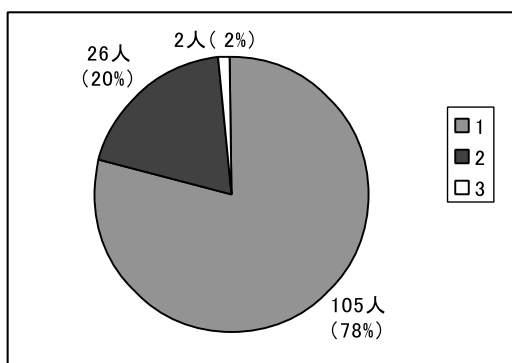
- ①恐ろしい情報である。78人 (58%)
- ②感染性は弱く、それほど心配する必要はない。14人 (11%)
- ③合理的に判断して、いちいち大騒ぎする必要はない。12人 (9%)
- ④死亡率は高く、恐ろしい。27人 (20%)
- ⑤その他。2人 (2%)

表 8：人食い菌ニュースの受容度



問 I を「恐ろしい感染症」情報として深刻に受け止めているグループ (①と④を選択したグループ) と、比較的冷静に受け止めているグループ (②と③を選択したグループ) とに分けると、その比率は次のようになった。

表 9：恐怖情報と受け止めたグループと冷静に受け止めたグループの割合



全体の78%・105人という圧倒的に多くの被験者が、記事を恐ろしい感染症として受容していることが分かる。「合理的に考えれば、健康人がそれほど恐怖に感じなくても良いものである」、「この記事の取り上げ方は大げさではないか」と冷静に情報を受容した回答者は20%・26人に過ぎない。

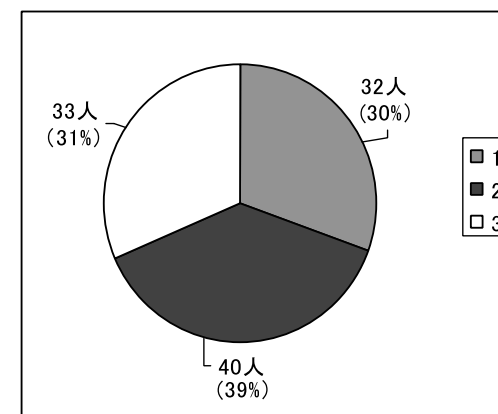
かった。このアンケートの結果からうかがえるのは、人は合理的な根拠を示しているリスク情報の場合が、「アイスマンの呪い」のような論理的根拠のない恐怖情報に比べ、情報をより強く受容するということである。

情報の受容の要因としては、健康や病気に対して日頃から神経質である場合、より受容し易くなると推察できる。そこで、人食い菌情報をリスク情報として受け止めた105人を対象にした問IIの回答を見ると次のような結果となった。

- ①もともと健康や病気に対して神経質である。32人 (30%)
- ②この記事を見て、日頃から健康や衛生に気をつけておくべきだと思った。40人 (39%)
- ③その他33人 (31%)

健康や病気に神経質な人がこの記事を「恐ろしいリスク情報」として受容した割合は相当に高い。恐怖心が情報を過敏に受容することが推察できる。

表 10：人食い菌のニュースを恐怖情報として受け止めた背景

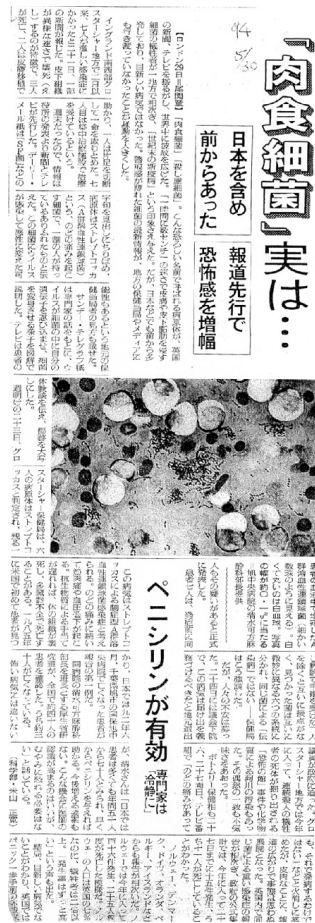


以上の結果から推察できるのは、日頃から病気や健康に対して神経質な人は、リスク情報に対しても過敏に受け止めるということである。また、合理的な根拠のあるリスク情報が論理的根拠のない恐怖情報よりも、懐疑心を抱かれることが少ないといえる。逆説的に言えば、合理的な根拠を示しておく、全体として非合理的な情報でも人は容易に信じるということである。

「死亡率の高い劇症溶連菌感染症」の記事に示されている合理的根拠とは「日本で14人が感染し、7人が死亡している」という内容だけである。日本人全体のうち感染者は7人、死亡者は7人という、感染率は極めて少ないし、死者も他の感染症に比較して微々たるものである。冷静に考えれば、大騒ぎする情報ではない。ましてやパニックに陥る話ではない。

実は「死亡率の高い劇症溶連菌感染症」と題するこの記事は、後に通常のありふれた細菌によって引き起こされた病気であり、通常の生活をしている健康な人であれば、感染の問題はないことが分かった。朝日新聞は94年5月30日付けで事実上の修正記事を掲載したが、この場合、情報の受容





1994年5月30日：朝日新聞

の仕方としては冷静に受け止めた方が適切な判断を示したことになる。

### 第V章 信念・思考の修正

人はいかに科学的根拠のない荒唐無稽な情報であっても、論理的根拠のないニュースであっても、それがニュースとして報じられると信じやすい。合理的な根拠のあるリスク情報も論理的根拠のない恐怖情報もともに、懐疑心を抱かれることなく受容されやすい、ということがいえる。

しかし、人間の知性とは事実を正しく認識し、筋道立てて論理展開し、判断を下すことである。少なくともそうした思考をするようになって人間は迷信と偏見から自由となり、より豊かで平和な社会を築けるようになったといえる。だとすると、合理的根拠のないニュースに基づいて人が判断し、その修正が効かなくなる状況は、再び迷信と偏見とに満ちた危険な社会に陥る危険性ははらんでいる。

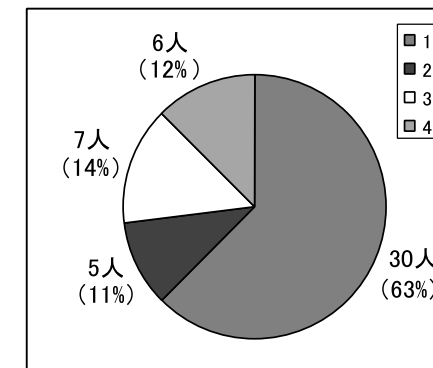
果たして、人は根拠のない情報に接して信じ込んだ場合、その修正は可能であろうか。筆者は第

II章で述べた「祈りの効果」を信じるか否かのアンケートの実施後、すぐに48人を対象に次のような調査を行った。改ざんした朝日新聞の偽記事(A)に変えて、本物の記事(B)を示して、記事の内容に肯定的であるか、否定的であるかをアンケートで答えてもらった。結果は次の通りであった。

- |                        |           |
|------------------------|-----------|
| ①記事の通り祈りに効果があるとは信じられない | 30人 (63%) |
| ②人間には霊的な能力がある          | 5人 (11%)  |
| ③祈りの効果がないという記事は正しい     | 7人 (14%)  |
| ④祈ることで人間は不思議な力を発揮する    | 6人 (12%)  |



表11：「祈りの効果なし」についての受容



記事の内容に基づいて、①と③を選択した回答を「祈りの効果を感じない」回答、②と④を選択した回答を「祈りの効果を感じる」回答として再計算すると、「祈りの効果はない」とする意見が26人 (54%) から37人 (77%) へと大幅に増加。「祈りの効果はある」とする意見は22人 (46%) から11人 (23%) に減少した。

本物である「祈りの効果なし」の記事の方が正しいと考えて、自らの意見を修正したのだ。「祈りの効果はある」とする意見の修正率は50%に達した。2つの記事を読み比べてより合理的な方に意見を修正したのと考えられる。修正した意見を加えると、根拠の薄い祈りの効果を「信じる」学生は全体の30%に減少、より合理的で適切な判断である「信じない」学生が圧倒的多数を占めるようになった。

しかし、祈りの効果はあるとする意見は23%残っており、最初の情報で受容し、構築した意見は一定割合で持続することも確かである。

## 第VI章 メディアの信頼度と影響度

今回の一連の調査・考察を通じて、非合理的な情報に対する受容特性でいくつかの知見を得ることができた。同時にニュースを通しての新聞の影響度の大きさを確認することができた。

例えば、それは「祈りの効果大」とする回答が、「祈りの効果なし」とする本物の新聞記事に接することによって大きく減少したことで証明された。また、アイスマンの呪いの記事を読んだ被験者で、アイスマンの呪い情報を信じた71人のうち16人は、この記事を読んで「呪いを信じるようになった」と答えていることからしても、新聞に掲載されたニュースの受容度は、合理的根拠があるなしに係らず大きいといわざるを得ない。

とくに今回アイスマンの記事に接した133人のうち16人が、それまで信じていなかった合理的な根拠のない非合理情報を信じるようになったことは、記者及びゲートキーパーのニュースに対する価値観、判断力の責任の重さを示しているといえる。この記事に関して、朝日新聞の記者やゲートキーパーの情報に対する価値観がどのようなものであったかは不明だが、呪いの存在とその効果があることを読者の思考論理に組み込ませたことは確かである。記事が興味本位に読者に読まれることを前提としたものであったにせよ、論理的根拠のないニュースが、人の論理的思考回路のなかに組み込まれ、先有傾向となる可能性が高いことは、論理的思考や科学的思考が無知の闇から人々を解放したことを考えると、配慮に欠ける情報提供であるといっていよう。

人はいかに科学的根拠のない荒唐無稽な情報であっても、論理的根拠のないニュースであっても、それがニュースとして報じられると信じやすい。新聞の読者は、活字を読み、文章を論理的に追っていく。従って、新聞の読者は論理的思考を育むといわれる。しかし、今回の考察では、ニュース自体に論理的根拠や科学的根拠が欠けていた場合には、読者の思考の論理性は成立しない場合が少なくないことが推察された。

一方、テレビでこのような論理的根拠や科学的根拠のないニュースやニュース的衣を被ったバラエティー番組が報道された場合、視聴者のニュース受容形態は新聞とは異なったものになると予想される。一般的に、テレビ報道は「人間や事件の複雑な全体像を扱う際に、知識や情報を交えた遅い情報を基礎に物事を考える営みが苦手なようである」<sup>⑤</sup>とされているが、だとするとテレビにおける、論理的根拠や科学的根拠のないニュースの受容は新聞以上に大きいかもしれない。しかも、新聞離れが顕著な中で、テレビによる思考形成効果はメディアの中でも強力な作用があるとされる。

もっとも、メディアの思考形成効果は視聴率や読者のアクセス数だけで決まるわけではない。メディアの信頼度とも関連する。視聴者が多く、影響度も大きいとされるテレビだが、情報への信頼度が低ければ、その効果も限定的であると考えられる。一方、読者が少なく、影響度もテレビに

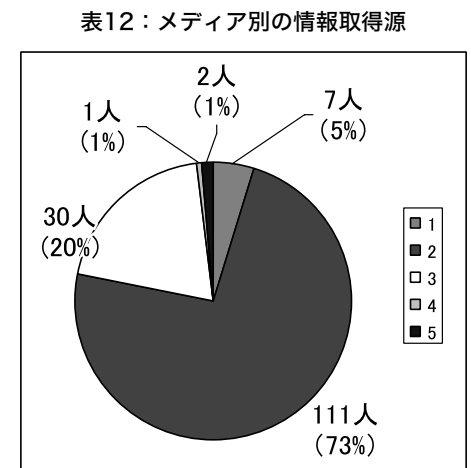
比較して小さいとされる新聞だが、信頼度が高ければ、その効果はメディアへのアクセス量以上に大きいと判断できる。

そこで筆者は人のメディア別の情報取得傾向とメディアに対する信頼度を考察した。被験者は151人（アイスマン、人食い菌で被験者となった学生133人プラス18人）。アンケート形式で以下の質問に答えてもらった。

- ①学生が主としてどのメディア（新聞、テレビ、インターネット）から情報を取得しているか
- ②各メディアに対する信頼度の高いものはどれか。（回答は選択式で各回答の中から、一つだけを選択することとした）

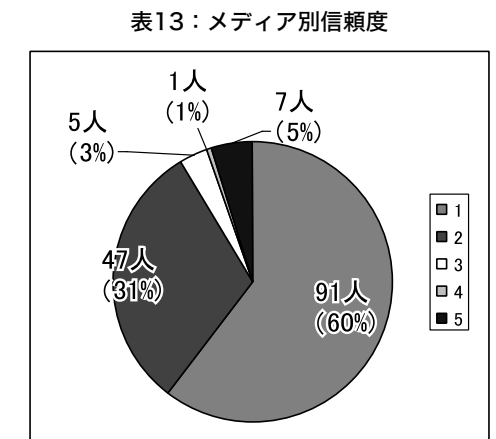
質問①の「学生が主としてどのメディア（新聞、テレビ、インターネット）から情報を取得しているか」一の結果は次の通りであった。

①新聞	7人 (5%)
②テレビ	111人 (73%)
③インターネット	30人 (20%)
④ラジオ	1人 (1%)
⑤その他	2人 (1%)
*その他は携帯	



質問②の「各メディアに対する信頼度の高いものはどれか」一の結果は次の通りであった。

①新聞	91人 (60%)
②テレビ	47人 (31%)
③インターネット	5人 (3%)
④ラジオ	1人 (1%)
⑤その他	7人 (5%)



「学生が主としてどのメディア（新聞、テレビ、インターネット）から情報を取得しているか」という問いでは、テレビが他のメディアを圧倒している。新聞はインターネットよりも少ない。若者の新聞離れが指摘されているが、調査対象が学生であり、高額な購読料を支払う新聞を購読しているケースが少ないことも、新聞利用の低さの理由の一つとして考えられる。新聞に代わって活用され始めたのがインターネット。5人に1人が情報源として活用している。

しかし、信頼する情報源としては新聞が他のメディアを圧倒、被験者の60%に当たる91人が新聞を最も信頼できるメディアと答えている。これに対し、情報源として圧倒的に利用者の多いテレビは、信頼度では新聞に大きく引き離されている。主たる情報源をテレビに頼っていると答えた回答は111人だが、このうちテレビを信頼すると答えた回答は47人に過ぎない。半数以上の64人が他のメディアを信頼すると回答したことになるが、その内訳は全員が新聞。テレビを主たる情報源として活用しながらも、信頼するメディアは新聞とする答えが多い。テレビを主たる情報源としている人のテレビへの信頼度は42.3%、全被験者に対する割合では31%に過ぎない。

同様に、情報源として新聞以上に利用されているインターネットだが、その情報を信頼していると答えた回答は30人中5人どまり。主たる情報源をインターネットに頼っている人の、インターネット情報への信頼度はテレビよりも低く16.6%に過ぎない。

一方、新聞を主たる情報源としている7人の回答者は全員、信頼する情報メディアとして新聞と回答している。

以上の考察結果から分かることは次の通りである。

- ①被験者がニュースの取得源として利用しているのは圧倒的にテレビである。
- ②テレビへの信頼度は高くない。
- ③信頼度は圧倒的に新聞が高い。
- ④新聞をニュース源としているのはインターネットの半分である。
- ⑤インターネットへの信頼度は低い。

ここから垣間見えることは「被験者の多くはテレビからニュースを受け取っているが、必ずしも全面的に信頼して受容しているわけではない」ということであり、もう一つは「被験者の多くは新聞をニュースの取得源として利用しているわけではないが、そのニュースは信頼している」ということである。しかし、ニュース源として利用していないにも関わらず新聞を信頼しているというのは、合理的な根拠に欠けているというべきであり、新聞は信頼できるというイメージによるものか、活字信仰ともいえる先入観による判断といえるかもしれない。いずれにせよ、新聞を読んだ読者はその内容を信頼する傾向がテレビやインターネットより高いことは確かなようである。

一方、テレビについては、その情報を必ずしも信頼していないにも関わらず情報源として利用している実態が読み取れる。通常、信頼するからこそニュース取得源として用いると考えるのが合理的だが、テレビに対する人のニュース受容の特性は、「信頼性では劣るが利用はする」というねじれ現象が起きていると考える必要がある。逆に言えば、ニュースの受容度は、視聴者や読者が各メ

ディアから受け取るニュースの量と、受容者のメディアへの信頼度の相関関係で考えなければいけないということになる。

## おわりに

新聞を用いた教育（N I E = Newspaper in Education）が小中高等学校で盛んになってきた。新聞は児童、生徒に社会への関心を持たせる「生きた教材」である。児童、生徒は生きた教材である新聞を読んで、ニュースに対するイメージや感想を抱き、思考及び思考回路を形成していく。その意味で新聞は教科書と同様、もしくはそれ以上の知的作用を児童・生徒に及ぼす。

一方、新聞記事は、同じ取材源で同じデータに基づくニュースであっても、メディアの違いによって記事の取り上げ方や論説の内容に大きな違いがある。また記事の中には、明らかに論理的根拠の脱落したニュースもある。信頼性に欠ける情報も少なくない。そうしたニュースを児童・生徒がどこまで受容するのか。受容の仕方によっては真理からかけ離れた認識をし、錯誤に基づく論理回路を育みかねない。

論理的根拠を欠くニュース記事は本来、メディアの問題である。児童・生徒にニュース受容の責任を課すべきものではない。しかし、テレビをはじめとするメディアがニュース報道の名の下に進めたニュースの娯楽化や真実を装ったバラエティー番組によって、真理や真実の姿が見えにくくなり、視聴者とくに児童・生徒の思考形成に大きな影響を与えるようになっている現在、ニュース受容の実態を考察する必要がある。

本論文は、以上のような観点に立って、新聞のニュース報道が人の意見形成、イメージ形成、思考論理形成にどのような影響を与えるかを考察したものである。本研究は始めて3年になるが、今回は論理的根拠のない不合理な情報に対して人がどのように受容するかを考察したものであり、以下の知見が得られた。

- ・合理的根拠がなく非合理的と見られる情報であっても新聞情報の受容度は高い。
- ・非合理的な情報だけに接すると、合理的な思考は埋没する可能性がある。
- ・非合理的な情報だけに接しても、合理的な思考をしたり懐疑心を持ったりする人はいる。
- ・非合理的な情報に接した後、合理的な情報に接すると合理的な思考に変わることが多い。
- ・いったん非合理的な情報に接して信じ込むと、合理的な思考に接しても、非合理的な思考が完全になくなることはない。
- ・ニュース自体に論理的根拠や科学的根拠に欠けていた場合には、読者の思考の論理性は成立しない
- ・最初に受容した情報はインパクトが強い。
- ・論理的根拠に欠けたニュースであっても、いったん受容されると思考回路の中に組み込まれ、先有傾向を生じる。

- 根拠を示しておくこと、全体として非合理的な情報でも信じやすい。
- 新聞は信頼度がテレビやインターネットに比べて格段に高い。

本研究は被験者のサンプルが少ない点などデータとして今後、さらに深化・充実させる必要があるが、最後に、情報に対して懐疑心を持つことと、根拠のある合理的推論に基づいて情報を読み取っていくことの大切さを強調しておきたい。特に、新聞はそこに掲載されている情報に対する読者の信頼度が他のメディアに比べて顕著に高く、N I Eで活用するに当たっては情報の真偽や影響度を十分考慮する必要がある。また、N I Eに限らず教育現場では指導者である教員自身が幅広い知識を持ち、常に合理的な思考をするような指導をしていくことも大切である。

## 引用文献

- ①野中博史『宮崎公立大学人文学部紀要』2005年、宮崎公立大学
- ②野中博史『宮崎公立大学人文学部紀要』2005年、宮崎公立大学
- ③野中博史『宮崎公立大学人文学部紀要』2005年、宮崎公立大学
- ④『朝日新聞』2006年2月15日
- ⑤山内昌之『朝日新聞』2006年3月2日

## 参考文献

- ①駒村圭吾『ジャーナリズムの法理』嵯峨野書院、2001年
- ②大石裕『現代ニュース論』有斐閣、2000年